

冬のモンゴル・オオカミ猟

岩手医科大学泌尿器科学講座 藤岡 知昭



はじめに

モンゴルでは、「成吉思汗・蒼きオオカミ」に代表されるように、オオカミは強く・賢く・速いことの象徴として誰からも畏敬の対象とされています。反面、オオカミは馬、羊、ヤギおよび牛等大切な家畜の天敵で、遊牧民は生活のために駆除する必要があります。害獣でもあります。今回の旅行の目的は、現地の駆除隊に加えてもらうことで、この未知のオオカミの狩猟を経験することでした。同行者は長年の狩猟・射撃の仲間2名でした。使用した猟銃は、ロシア製のレーザー標準付ライフル自動銃で、日本では未知のもので、現地の旅行社に借用・使用できるような手配を依頼しました。今回の旅行では、防寒対策が最も重要で、極地用の羽毛服の上下、羽毛の寝袋を持参しましたが、防寒靴は現地で内側に犬の毛皮を貼り付けた長靴を購入しました。

初めてのオオカミとの出会い

モンゴル入国は平成19年12月28日の夜半。その2日目の朝、私ども3名に案内役のハンター兼運転手3名と日本語通訳2名を加えた構成で、四輪駆動車2台に分乗し、首都ウランバートルを出発しました。車の温度計は、外気温-30℃を示していました。沿道のコンビニエンス・ストアで多量のウォッカおよび飲料水等を購入し、一路国道を東方に、さらに雪に覆われた間道を北東に分け入り、約4時間の行程で、山間の遊牧

民のゲルに到着しました。途中、車の1台がパンクするというアクシデントに見舞われましたが難なくハンターらにより対処でき、また、峠の雪原では、案内人に一直線に走る大きな足跡をオオカミのものと説明され、私どもの彼らに対する信頼と狩猟に対する士気は大いに上昇しました。加えて、「昨晚、ゲルの近くで羊が襲われた」との情報で、意外と簡単に獲物を手にすることができるかもしれないと思いました。

ゲルの奥さんに用意していただいた塩入り熱い牛乳と羊のミンチ肉の包み饅頭の昼食の後、追い出しの応援に騎馬で駆けつけた近隣の住民たちを加え、ゲルの向かいにある急峻な森の斜面の巻き狩・追い出し猟を行うことになりました【写真1】。私どもは、ゲルの主人・猟師の案内で、森の斜面の稜線へ直行し、その獣道の箇所立つ場・待機狙撃場所に分散しました。車は、雪原の急斜面を2台で交互に、より容易に走行可能な箇所・道らしい所を探索し進みました。私どもは、雪道には慣れているはずですが、車内にしがみつき、今まで経験したことのないスリル満点な道中でした。現地のハンターと組になり、おのおの場所で、銃の取り扱い実戦・射撃の指導を受けつつ待機していました。森の下方より進んでいる騎馬の勢子の携帯無線機で、オオカミ発見の連絡が入った直後、私の下方、森の中の立つ場の方向から数発の銃声が聞こえました。「まさかこんなに容易くオオカミに

出会えるのか」と思いましたが、私の相棒の手振りや、オオカミが接近していることを理解し緊張が張り詰まりました。約30分ほど経過して、突然、目の前に勢子の馬が顔を出しました。相棒の説明では、幸運にも下の2人が発砲、銃弾はオオカミに命中したものの致命傷にならず、半矢の状態です。逃走中であり、それを他の勢子たちが追跡しているとのことでした。車の場所に射手全員と勢子の一部が集合し、とりあえず初矢の幸運をウォッカで祝いました【写真2】。猟師の長が、「オオカミに出会えれば幸運、撃てればより幸運、仕留めることができれば最高の幸運」といった言葉が妙に印象深く残りました。数時間にわたる追跡・搜索にもかかわらず、残念ながら森の勇者は回収できず、河沿いの深い洞窟に逃亡されてしまいました。

厳寒とウォッカの恐怖

最初に訪問したゲルの場所より北方に約2時間走行し3泊滞在する谷間のゲル集落に到着しました。翌早朝、ゲルの主人で猟師の長にオオカミの探索に出てもらい、彼の案内で、森の場所を変えながら何度も巻き狩りを試みましたが、森の勇者は一度も姿を見せず、忍耐の猟・耐寒の行が続きました。救いは、連日の無風・晴天とすばらしい風景でした。同行ハンターは、「12月下旬から1月にかけてオオカミの交尾期なので、雄オオカミは雌を追尾して数10kmの範囲を移動するので、この時期では、たとえ早朝にオオカミの足跡を見つけても、日中までには既にその場所から立ち去り、付近に滞在しているのは稀」と説明していました。

滞在2日目は大晦日で、近隣の住民全員が長のゲルに集合し、奥さんによるもてなし特別料理・ご馳走の猪の頭部の蒸し焼き、ポテトサラダと多量のウォッカにより賑やかに年



写真1 騎馬による勢子・追出し役の現地猟師



写真2 狼猟初日、ウォッカの乾杯



写真3 オオカミ狼の最終日・ラストチャンス

忘れのお祝いをしました。午前零時、極寒、満点の星空のもと、銃弾より抜き取った花火で作った花火とシャンパンの乾杯で、めでたく新年を迎えました。

元旦の外気温は、 -50°C を記録しました。2台の四輪駆動車の内1台のエンジンが作動しない状態になりました。原因は、前夜の壮烈な宴会でドライバーが泥酔し暖気運転をすることを一晩中忘れたためと思われました。バッテリーの交換でも対応できずに、最終的に車の下に焚き火することでこの危機から逃れることができました。

遅い出発となりましたが、猟場の変更のため往路をウランバートルへと戻り、さらに北西1時間30分程度の行程にある、酪農を営むゲル集落に移動しました。途中、飲みつくした酒類を調達しようとスーパー店に立ち寄りしましたが、そこの酒類コーナーが全て閉鎖されており、容易に入手できる状態ではありませんでした。というのは、大晦日にウォッカの飲用で十数人が中毒死し、その原因は混入された工業用アルコールの可能性が高いと報道された結果、政府はその対応策として酒類の販売を全面禁止したことによるものでした。とはいえ、このような現状を少しも気につけない私ども「懲りない飲んべい軍団」は、今後の酒なしの数日間の生活に耐えられるはずもなく、可能な限りの手段を考え、何とかウォッカ数本を入手、車中に積み込むことに成功しました。「体調の変化があれば直ちに報告すること。水分を多めに取ること」を同行者全員に

徹底させたが、その科学的意味はほとんどないと反省します。

オオカミ狼・ラストチャンス

到着した集落は、既に遊牧を放棄し定住生活をしており、住居のゲル周囲の敷地を板塀で囲むことにより土地を私有化していました。この集落長で猟師の頭の父親に今後のオオカミ狼を占ってもらったところ、「獲物が有るか無いかは解からないが、楽しい狼になる」との答えでした。占いはラマ教の手法を用いていました。

翌朝も快晴、猟師頭の案内で、乗馬した十数人の若者よりなる勢子の応援を得て、集落の西方の地域を、場所を順次変更しながら何度も巻き狩りを繰り返しました。この地域は、最初に行った地域に比べて積雪が幾分多いのですが、森林が散在するなだらかな広範な地形でした。狼場では、多くの新しい動物の足跡を見つけることはできるのですが、その本体を見ることはありませんでした。夕刻遅くまで狩猟を続けたが、オオカミとの出会いは一瞬で、発砲はできたものの、無念にも銃弾は命中しませんでした。

狼の最終日、早朝に集落長の携帯電話に、「昨晚、子牛がオオカミに襲われた」との連絡をもらい、とるものもとあえず出発することにしました。昨晚の被害地は集落の東方、樹木に覆われた高い山の麓とのことで、「多量に肉を食らっているオオカミは遠くまで行っていない」との判断でした。前方の山を裏側に回りこみ、森林の伐れた稜線を狙える立つ場に射手を配置する作戦となりまし

た。いつもと変わらず緊張した約3時間のドライブで、裏側から稜線の頭の直下の肩まで車で到達しました。森と草原の境となる稜線を良好な視界で見渡せる数箇所の立つ場に射手が配置されました。私は、山頂の肩から50m下方の位置で、雪原を隔てて目前に稜線がくっきり見渡せましたが、稜線までの距離は少なく見積もっても300m以上はあり、銃弾の到達できる場所と狙った場所との誤差調整が難しいと思いました。立つ場で銃に装弾、安全装置を開放してまもなく、下の立つ場から順々に連続して銃声が聞こえました。私の視界にも、ネズミの大きさに見える黒い動物が飛び込んできました。オオカミが全力で逃走しているのが確認できたので、狙撃を開始しました【写真3】。弾倉は10発装弾可能でした。引き金を引くごとに標的の動きが微妙に変化するのですが倒れることはなく、稜線の頭へと姿を消しました。さらに、3発銃声が聞こえました。これが、森の勇者を撃ちました最後でした。

終わりに

冬のモンゴルの壮大さと厳しさ、オオカミ狼の面白さと難しさを実感する貴重な旅でした。悔やまれるのは、狩猟前に、銃および装弾を最長距離で使用した場合の性能を確認できなかったことであり、今回の反省事項であります。とはいえ、今回の狩猟を全面的に支援してくれたモンゴルのすばらしき仲間とともに、ウォッカで命を落とさなかったことを蒼きオオカミに感謝しています。